

かつての文豪たちも怪談を書いていた

怪談はどのように語り継がれてきたのか

ここ数年、日本で怪談ブームが起きているが、歴史を紐解いてみると今回が初めてというわけではないようだ。怪談の歴史は、その時代その時代の世相が大きく影響しているという。怪談文学に詳しい東雅夫さんに怪談の歴史について聞いた。

文芸評論家

東 雅夫

●ひがし・まさお 1958年、神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。『幻想文学』『幽』の編集長を歴任。『遠野物語と怪談の時代』で第64回日本推理作家協会賞を受賞。著書に『百物語の怪談史』『文豪たちの怪談ライブ』ほか多数。

怪談が流行する時代

私が怪談専門雑誌『幽』を創刊したのは、二〇〇四年のことでした。当時は、怪談ブームと言われる現在と比べて、怪談を書く人も、語る人も、積極的に注目する人も少なかった。怪談ブームからはほど遠い状況でした。そんななか怪談好きな作家

や編集者が集まって、怪談を一生懸命に流行させたいと思い『幽』を立ち上げました。

刊行を続けていくうちに、怪談——とくに「怪談実話」（実話怪談という俗称は文法的に誤りです）というジャンルに関心が徐々に寄せられるようになり、最近の怪談ブームにつながっていききました。二〇一八年まで刊行した『幽』は、妖怪専門雑誌の

『怪』と合併し、『怪と幽』にリニューアルして現在も一応続いています。一説には、社会不安が広がる時代に、怪談が流行すると言われていました。逆に安心、安全な時代に怪談は関心を持たれにくい。その背景には、怪談ならではの特色があります。

怪談は、我々が暮らす社会とは違う異界、向こう側の世界をあつかう分野と言えます。異界は、我々が生

きる現実の世界とは違って、曖昧であやふやで、よくわからない。不安定な社会での暮らしは、先が見通せず、多くの人が不安を抱えています。

現実社会が不確かだからこそ、未知の異界や、向こう側の世界に関心を持つ人が増えると考えられます。

現代の不安定な社会を象徴するのが、十二年前の東日本大震災でしょう。

ペントを行ってみると震災で身内を亡くした方も怪談を聞きにきてくれました。

なかには、涙ながらに怪談に耳を傾けるお客さんもいたそうです。被災した人たちは、理不尽に奪われた大切な人の存在を、幽霊でもいいから身近に感じていたいという気持ちだったのでしょうか。

う。実は、東日本大震災前年の二〇一〇年から仙台の出版社「荒蝦夷」

おどろおどろしくて、興味本位で語られた怪談は、肉親との絆を確かめるために、亡くなった人が幽霊とな

と共同して「みちのく怪談プロジェクト」を進めていました。「荒蝦夷」の代表である土方正志さんと怪談イベントなどを開催し、東北の怪談を盛り上げようと考えていたんです。

……怪談にはそんな偏見があります。震災にかんする怪談に対し、不謹慎だと感じる人たちの気持ちもわからないではありません。ただ私は、「慰霊と鎮魂の文芸こそが怪談である」と考えています。実際に被災地

そんな矢先に、東日本大震災が発生した。土方さんは戸惑っていました。

かめたり、無念な思いを伝えたりするために、亡くなった人が幽霊となって現れる話が多いようでした。人を怖がらせたり、驚かせたりしない。

津波と原発の被害に苦しむ東北で、怪談イベントを行うのは不謹慎なの

政治、経済、文化の中心が上方から江戸に移行し、経済発展とともに町

二百年前と百年前の怪談ブーム

不安定な社会で怪談が流行する。

それは現代だけの現象ではありません。

二百年前の江戸時代末期。文化

文政時代（一八〇四年から一八三〇年）

にも、怪談文芸が大流行しました。

政治、経済、文化の中心が上方から